

研究ノート

英語学力と第3言語選択

山田 純

問題の所在

大学教養課程では、第3言語（第2外国語）が課せられるが、学生はどのようにその第3言語を選択するのであろうか。一般的には、学生は「第3言語学習は第2言語学習の延長線上にある」という仮説を意識的または無意識的にもっているのではないか。この仮説は、第2言語学習と第3言語学習とは高い相関関係にあることを含意する。そうすると、学生は、自分の英語学力が高いと思えば、ヨーロッパ言語である独語や仏語も比較的容易に学習でき、単位取得も保障されると考えるであろう。また、英語学力が低ければ、その逆の予測をすることになる。これは、入学時点の英語学力と第3言語学習には、有意な正の相関がある、という仮説とほぼ等価である。

一方、中国語・朝鮮語は、ヨーロッパ言語と異なるので、英語学力とは高い相関関係にないという考えかたができる。すなわち、無相関である。中国語や朝鮮語は、アルファベット文字を使用せず、漢字やハングルを使用するので、そのようなとらえかたは、ほかの要因が一定であるとすれば、理にかなっている。

このような考察が妥当であるかどうかは、容易に検証できそうである。具体的には、つぎの仮説を検証することになるであろう。

- (1) 英語学力の高い学生は、ヨーロッパ語を、英語学力の低い学生は、中国語または朝鮮語を選択するであろう。もしこの傾向が強ければ、選択希望が一貫しているはずである。たとえば、第1希望がドイツ語であれ

ば、第2希望は、フランス語などヨーロッパ言語にするであろう。

(2) ドイツ語の成績は、英語学力と有意な相関関係にあるであろう。

(3) 中国語の成績は、英語学力と有意な相関関係にないであろう。

本稿では、上記仮説を検証することにより冒頭の「どのように第3言語を選択するか」という問題に部分的に答える。本研究で得た結果は、微妙ではあるが、いずれもかなり否定的であった。これを踏まえて、第3言語学習のいくつかの点について若干の考察を加える。

方法

被験者 被験者の母集団は、平成14年度広島大学入学者2,506名である。標本としては、便宜上、いくつかの学部を定めた。英語学力は、大学入試センターの英語の成績とした。これは入学時に各学生が自己申告した得点である。

分析 第1仮説について、2通りの分析をおこなう。まず、各学生は、入学時に第3言語の履修希望をするが、これは第1希望と第2希望の2つからなる。上述のごとく、一貫性があるならば、第1希望と第2希望の集計で、両方ともヨーロッパ言語あるいは両方ともアジア言語が多いはずである。実際にそうなるかどうか、分布をみる。この対象者は、歯学部、経済学部、総合科学部合計344名であった。

つぎに、ヨーロッパ言語の代表としてドイツ語を、アジア言語の代表として中国語を例にして、入学時の英語成績の比較をおこなう。もし第1仮説が正しいなら、ドイツ語履修群の英語成績が中国語履修群の成績よりも有意に高いであろう。この対象者は、上記対象者と同一である。

第2仮説について、ドイツ語履修者の第1 Semester 終了時のドイツ語成績と入学時の英語成績の相関を求める。この仮説が正しいなら、有意な相関があることになる。対象者は、文学部・総合科学部の連合クラスのドイツ語受講者31名である。

第3仮説について、同様に、中国語履修者の第1 Semester 終了時の中

国語成績と入学時の英語成績の相関を求める。この仮説が誤りであるなら、有意な相関があることになる。対象者は、総合科学部の中国語受講者30名である。

結果

第1仮説 第1希望と第2希望のクロス分布は、表1に示す通りである。この表は、多くのことを示しているが、本仮説にかかわるところでは、たとえば、ドイツ語を第1希望とした96名のうち、第2希望はフランス語が40名で、中国語が30名であり、有意な差が見られない ($\chi^2=1.43$, $df=1$, n.s.)。ヨーロッパ言語を込みにすると、62名で、アジア言語の34名よりも有意に多い ($\chi^2=8.17$, $df=1$, $p<.01$)。しかし、これで、ドイツ語の第1希望者がヨーロッパ言語を第2希望にする傾向にあるとはいえない。なぜなら、中国語を第1希望とする128名のうち、ドイツ語の第2希望者が47名、フランス語の第2希望者が46名で、約72%がこれらの言語を第2希望にしているからである。

表1 第3言語希望調査のクロス集計結果

第2希望	第1希望						計
	独語	仏語	露語	西語	中語	朝語	
独語	—	32	2	6	47	6	93
仏語	40	—	1	5	46	2	94
露語	3	2	—	2	1	0	8
西語	19	11	0	1	23	1	55
中語	30	21	1	11	—	11	74
朝語	4	1	1	3	11	—	20
計	96	67	5	28	128	20	344

また、第1第2希望が両方ともヨーロッパ言語は、124名(36%)、両方ともアジア言語が22名(6%)で、合わせて全体の42%にとどまっている。すなわち、半数以上がヨーロッパ言語とアジア言語を組み合わせて希望し

ている。

さらに、ドイツ語受講者と中国語受講者を対象に、英語成績を比較すると、前者が149.3点 ($SD=17.3$)、後者が145.8点 ($SD=18.0$) で、有意差は認められなかった [$t(222)=1.47, p>.10$]。

以上の結果を総合すると、本仮説は支持しがたいという結論になる。

第2仮説 英語成績およびドイツ語成績をそのまま入力した結果、 $r(36)=-.07, n.s.$ であった。しかし、英語成績およびドイツ語成績に孤立値が存在していた。そこで、それぞれの平均値から2SD以上離れている成績を孤立値として除外し、再度、相関を求めたところ、 $r(33)=.27, n.s.$ で有意水準に達しない。したがって、入学時点の英語学力と入学後1 Semester終了時点のドイツ語学力とは無相関である。

第3仮説 まず、データを改変しないままで、 $r(28)=.39, p<.05$ であった。したがって、このままで見ると、本仮説は、棄却され、対立仮説として、「英語学力と中国語の成績は、正の相関関係にある」が支持される。しかし、やはり、孤立値の存在が認められ、第2仮説の場合と同様に、孤立値を除外すると、 $r(26)=.24, n.s.$ となり、ここでも、入学時点の英語学力と入学後1 Semester終了時点の中国語学力とは無相関であるという結論になる。

考察

本研究結果は、第1・第2仮説をほぼ棄却する傾向を示した。しかし、データ数が小さく、加えて、とくにドイツ語の場合には有意の傾向もうかがえるので、断定できない面がある。その上で、本結果を額面どおりに受け取るとするならば、心理言語学的には、重要な理論的意義をもつ。それは、外国語適性能力という概念 (e.g., Carroll, 1963; Carroll & Sapon, 1959) のとらえかたの再考を促すからである。外国語適性は、知能と同様に発達的に安定的であると解釈される。しかるに、6年間で培われた英語学力が外国語適性能力の表れであるとする、その能力は、第3言語学習

に反映するはずであるが、ここでは、そのような結果が得られなかった。したがって、外国語適性能力は、発達的に効果が微弱化する可能性があることになる。たとえば読み書きが重視される外国語において、音素意識の重要性がクローズ・アップされるはずであるが、本結果は、それに対しても否定的である。その解釈のひとつは、こうである。入門期の場合には、音素意識の個人差が大きく、それが英語学力に強く反映する。ところが、大学生では、発達的にあるいは英語学習を通してその個人差が少なくなった状態にあり、第3言語学力に反映しなくなる。

これは、第2言語学習についてもあてはまるかもしれない。たとえば、Sparks et al. (1995) は、音素一書記素変換、意味知識、外国語適性の3要因がアメリカの9年生・10年生の外国語成績の60%を説明するという実験結果を報告している (cf. Sparks et al., 1997)。しかし、本研究からは、大学生になってはじめて外国語を学ぶ場合、外国語適性の寄与率が下がることが予測される。ただし、アルファベット圏内において、母語の音素一書記素変換が大学生の第2言語学習の重要要因であるとするならば (cf. Meschyan & Hernandez, 2002)、それは、音素意識が母語学習に反映され、それが第2言語学習に反映することを示唆する。それを一般化すると、日本人の場合、日本語漢字学力は、第2言語の英語学習には効果が小さいが、中国語学習では大きい可能性がある。これが本研究において交絡要因として作用しているかもしれない。

なお、ドイツ語の場合、第2言語（英語）から第3言語（ドイツ語）へ正負の転移が起こるはずであるが、本結果には、それが表面化していない。これは、正負が相殺されているのかどうか、あるいは言語適性と交絡しているのかどうか、詳細は不明である。

一方、外国語適性の効果が有意でない、あるいは微弱であるとする、第3言語学力を規定する要因は何か。ここでは、一般通念に近い解釈が成り立ちそうである。現実的には、大学に入学して、過去の学習経験がリセットされた状態で、新たなスタート・ラインに並び、第3言語学習が始

まる様相がうかがえる。高校課程ともっとも異なるのが、この第3言語学習であろう。そこには、動機づけの個人差があり、当然のことながら、これが第3言語の成績を左右する最大の要因になっていると考えられる。そうすると、教育学的には、いかに学生を動機づけるか、という基本的問題に立ち返ることになる。恐らく、この動機づけの効果は、昔も同様に大きな要因であったであろう。しかし、これまでは、大学教育において、動機づけなどは、問題視されてこなかった (cf. 三浦, 1983)。しかし、動機づけが重要であるなら、教育心理学において得られたさまざまな知見 (e.g., Efklides, Kuhl, & Sorrentiono, 2001; Ferguson, 2000; Sansone & Harackiewicz, 2000) を *Zeitgeist* の中で、第3言語教育に翻訳・応用することは、実践上、可能であると思われる。

謝辞

広島大学総合科学部・言語文化研究講座の小川泰生先生および吉田光演先生に資料の提供をいただき、さらに査読委員の先生方から誤りや不明瞭な論調に対して的確なご指摘をいただきました。お礼申し上げます。本研究は、文部科学省科学研究費補助金基盤研究(C)(2)「英語読解構成要因の総合的研究」課題番号14510143の一環としておこなわれました。研究の機会を与えていただき、合わせて感謝申し上げます。

参考文献

- Carroll, J. B. (1963). A model of school learning. *Teachers College Record*, 64, 723-733.
- Carroll, J. B. & Sapon, S. M. (1959). *Modern Language Aptitude Test (MLAT) manual*. New York: The Psychological Corporation.
- Efklides, A., Kuhl, J., & Sorrentiono, R. M. (2001). *Trends and prospects in motivation research*. Dordrecht: Kluwer Academic Publishers.
- Ferguson, E. D. (2000). *Motivation: A biosocial and cognitive integration of motivation and emotion*. New York: Oxford University Press.
- Meschyan, G. & Hernandez, A. (2002). Is native-language decoding skill related to second language learning? *Journal of Educational Psychology*, 94, 14-22.

三浦省伍（編）（1983）『英語の学習意欲』大修館。

Sansone, C. & Harackiewicz, J. M. (2000). *Intrinsic and extrinsic motivation: The search for optimal motivation and performance*. San Diego: Academic Press.

Spark, R. L., Ganschow, L., Patton, J. et al. (1997). Prediction of foreign language. *Journal of Educational Psychology*, 89, 549-561.

Spark, R. L., Ganschow, L., & Patton, J. (1997). Prediction of performance in first-year foreign language courses: Connections between native and foreign language learning. *Journal of Educational Psychology*, 89, 549-561

English Language Ability and Selection of a Third Language in General Education

Jun Yamada

In this study, a general question was addressed as to how freshman students whose English language achievements broadly vary select a third language in their general education courses. Specifically, three hypotheses were examined: (1) Higher achievers of English tend to select a European language (e.g., German) while lower achievers an Asian language (e.g., Chinese). (2) English language achievement significantly correlates positively with German grade at the end of the first semester. (3) English language achievement does not significantly correlate with Chinese grade at the end of the first semester. Surprisingly, results were all in the negative direction. One plausible interpretation for these null findings is that the effect of foreign language aptitude is developmentally attenuated and then superseded by motivational factors created in the new situation. Some implications for further research are briefly discussed.